
天舞璃詠—テマリウタ—

蒼空癒炉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天舞璃詠―テマリウタ―

【Nコード】

N0545I

【作者名】

蒼空癒炉

【あらすじ】

火のように赤い髪の美少女と、水のように青い髪の美少年の…それぞれと思いと、絆の行方は―。

第一話：集う子供たち

この詠は…
巡り続ける輪廻の詠物語。

天舞璃詠―テマリウタ―

第一話

「集う子供たち」

夜…静かな暗闇と化す森に
何者かの術により操られた
何人かの少年少女が円を
描くかのように集った。

少年少女たちは見るからに
貧しそうな服を着ていて
操られているせいか
目に光が全く無い。

まるで壊れてしまった玩具のよう…。
そんな少年少女たちを
高い木の枝に、ちょこんと
座りながら、見下ろし…
不適な笑みを浮かべている者がいた。

火のように赤い髪。

そして、ぱっちりとした目。

一言で言うならば…美少女。

名は、季咲きゆき 天舞璃てまじ。

「おいおい…」

お前、また操ってんのかよ…」

と言って、はあ…と

溜息をついた少年の名は
碧瀬あおせ 祈璃亜きりあ。

彼は、天舞璃とは正反対に

水のように青い髪。

そして、優しそだが

どこかキリツとした目である。

こちらも一言で

言うならば…美少年。

「うるさいわね。

最近、楽しみが無いんだから
これくらい、いいじゃない。」

どこか、つまらなそうな表情と

鬱陶しそうな声で話す天舞璃。

そんな天舞璃に、また溜息をつく祈璃亜。

自分が悪いと自覚しているのか
いやはや、自覚していないのか…

天舞璃は、祈璃亜に向かつて

「そんなに溜息ばかりついてると…

現在の幸せも未来の幸せも

逃げていつちやうわよ？」

と、嫌味のように言った。

祈璃亜は「誰のせいだと思ってんだ…」
と思ったが、口に出すと面倒なことになると
予想したため、心の中で呟くだけにした。

「ったく。それより…」

お前さ、知ってんの？」

突然、真剣な表情になり

天舞璃に聞いてみる祈璃亜。

しかし、天舞璃は興味なさげに

「何を？」と聞き返した。

「だから…夜、子供が消えては…

山のどこかで変死してるって噂だよ。」

祈璃亜が、さらっと言うと

天舞璃はピクツと微かに反応した。

「もう噂になってるのね…」。

でも人間たちは

これを崇りだとも思っ

偽りの噂話を作るんでしょ

そう言っ、クスツと笑う天舞璃。

祈璃亜は、そんな天舞璃を

見て、背筋がゾクツとした。

第二話：終わる生命（いのち）

第二話

「終わる生命^{いのち}」

「な、なあ…天舞璃…」

祈璃亜の声が震える。

天舞璃は、知ってか知らずか

「何？」と聞き返すだけだった。

「あのさ…もう、やめとけよ。」

勇気を出して、訴えた祈璃亜。

その時、強い風が吹いた。

木々は揺れ、数枚の葉が

地面へと舞い落ちていった。

「初めてね。」

祈璃亜が誰かを庇うなんて…。」

風が止み、また静寂に包まれたあと

天舞璃は口を開いて、そう呟いた。

「天舞璃…？」

祈璃亜が、不思議そうに

天舞璃の名を呼ぶと…

天舞璃は恐ろしいくらいに
優しい優しい笑みを見せ

「そんなに子供たちを…

人間たちを救いたいわけ…っ?!

…なら、救ってみなさいよっ!」

そう言い放ったあと…

天舞璃が使える、そのうちの魔法の一つ
ファルアール
【烈火炎風】を唱えた。

「……………っ?!?!?」

祈璃亜は驚いた表情で
少年少女たちの体半分が
燃えてゆくのを、ただ…
見ていることしか、できなかった。

天舞璃は、そんな祈璃亜に

「やっぱり口だけね。

祈璃亜に人間を救うことなんて
できないに決まってるのよ。

だって、祈璃亜は無力だから。」

と、冷たく言い放ち
瞬時に消えてしまった。

取り残された祈璃亜は

あとから、悔む気持ちと

無力な自分に対する怒りと

天舞璃への想いが一気に込み上げ
涙が止まらなくなっていた。

（俺は…天舞璃の言うとおり…

人間すらも救えないほど

無力な奴なのか…？

でも…本当に庇いたかったのは…）

という想いを心で抱きながら…。

第三話：偶然…それとも必然か…

第三話「偶然…それとも必然か…」

祈璃亜は一人、枝に座り

色んな想いを巡らせていた。

すると、誰かの声が聞こえてきた。

「おーいっ！」

祈璃亜は、声のしたほうに
すぐさま視線を向けた。

木のすぐそばには、人の影が
祈璃亜を見つめて手招きをしている。

祈璃亜は不思議に思ったが
スツと木の枝から飛び降り
影のほうを向いた。

すると、月の明かりに照らされて
女性だということがわかった。

風になびく、綺麗な紫色の髪。
そして、少しキリッとした目。
いかにも大人の女性という感じだ。

祈璃亜は少しドキッとしながらも
見つめていることしかできなかった。

「ね、ねえ…」

少し困ったように

祈璃亜に、声をかけた女性。

祈璃亜は、少し驚きながら

「な、なんだよ？」と聞き返した。

「あのね、君…」

「この道、詳しいかしら？」

「え？…ああ、一応…詳しいけど？」

拍子抜けしたような感じが

詳しいということを返事すると

女性の表情が、みるみるうちに

ぱあっと明るくなっていた。

第四話：道案内

第四話「道案内」

祈璃亜と女性は村へと出る道を静かに歩いていた。

バサバサッ―

突然、木々から鳥たちがいつせいに飛び立った。

その音に驚いた女性は

きゅっ…と小さな悲鳴をあげ

祈璃亜の腕に抱きついた。

「……………／／／」

祈璃亜は思わず赤面してしまう。

「あ、あの…ごめんね…っ」

女性は、はっと気が付いて

恥ずかしそうに、祈璃亜に謝った。

祈璃亜は「だ、大丈夫だよ」と言って、照れながらも微笑んだ。

「良かったあ…」。

あ、そういえば…

まだ名前、言ってなかったよね？」

女性は、一安心したあと
名前を名乗ってなかったことを
いまさらながらも思い出した。

「あはは、そうだったな。

俺は、碧瀬 祈璃亜だ。」

「私は、宮野^{みやの} 結衣^{ゆい}。
よろしくね、祈璃亜君。」

そう言って微笑む、結衣。
祈璃亜も、微笑んだ。

「あ、ほら…着いたぞ。
ここから、少し歩けば
ちゃんと村に着くからな。」

そう言って、村へと繋がる道を指差した。
結衣は「わかった」と言って歩き出した。

そして、数歩歩いたところで
突然、祈璃亜のほうに振り返り
祈璃亜を、しばらく見つめてから

「今日は、本当にありがとう。」

と、優しい笑みを浮かべながら言った。

祈璃亜は「ああ」と言いながら
微笑み、手を振った。

結衣も同じく手を振ったあと
村へと走っていった。

第五話：夢となった記憶

第五話「夢となった記憶」

祈璃亜が結衣と別れた

ちよつど、その頃…

まごつかんしょ

魔灯館所に

天舞璃と一人の男が話をしていた。

「天舞璃、今日も

人間の子供たちを殺したのか？」

「はい。」

「あまり人殺しはするな。

お前の罪が重くなるだけだ。」

二人しかいない静かな室内に
男の心地よい優しい声が響く。

「わかりました。

ですが…あと少し…

あと、もう少しなんです…！」

少し声が大きくなった天舞璃。

そんな天舞璃を落ち着かせるように
優しく抱き締め、頭を撫でる男。

「なら、あと少しだけだ。

だが、無理はするな…天舞璃…。」

「はい、ありがとうございます。

——様…。」

天舞璃は、男のほうを見てそう言った。

男は、天舞璃を見つめ、無言で微笑んだ。
不安な気持ちを含ませながら…。

——果たして…

この男の正体は、一体…——

一方、祈璃亜は…

懐かしい夢を見ていた。

現在、^{いま}考えると

全てが嘘だったんじゃないか…

なんて思ってしまうくらいの

暖くて優しい夢を…。

第六話：懐かしい記憶

第六話「懐かしい記憶」

「きーりーあっ！」

祈璃亜を見つけると

すぐさま、がばっと抱きつく少女。

もちろん、この少女は天舞璃である。

「Σう、うわっ／＼／」

祈璃亜は、驚きと照れで
顔が赤くなっていた。

「ねえ、ところで…なにしてるの？」

天舞璃は可愛らしい笑顔を浮かべながら
丘の上にいた祈璃亜にたずねてみる。

祈璃亜は恥ずかしそうに
赤くなった顔を隠すと

「あ、明日…」

天舞璃の誕生日だろ？／＼／

だ、だから…綺麗な景色を
見せれたらいいなって…／＼／

と、言った。

天舞璃は、その言葉が
嬉しくて涙が溢れ出た。

「お、おいっ…?!….;…;

俺…なんか悪いこと言ったか?….;….;」

泣き出す天舞璃に驚き
慌てて聞く祈璃亜。

「ち、違うよ…っ、嬉しいの…。
祈璃亜…ありがとう…./../」

そう言っ
て
照れくさそうに微笑^{わら}う天舞璃。

その笑顔に安心かのように
祈璃亜も優しい笑みを浮かべた。

そう…これは…
まだ幼かった頃の話。

現在^{いま}では、もう…
あの頃のようににはなれない二人。

そんな二人に待ち受けているのは…

‘ 幸せ ’ という名の光か…

それとも ‘ 不幸 ’ という名の闇か…

そのこたえは…

まだ、誰にもわからない。

第七話：計画

第七話「計画」

とある部屋で…

何やらヒソヒソと聞こえる話し声。

「…で、以上ですな？」

「うむ。」

「しかし…これが失敗すれば…

我々に、崩壊の危機が訪れますぞ？」

そう言つて、少し怯える一人の男。

「その心配は無いよお♪」

と、その時…

可愛らしい少女の声が聞こえ、

一人の少女と一人の少年が姿を現わした。

「おお、これはこれは…」

「きめい騎冥、久しぶりだな♪」

少年も可愛らしい声である。

「久しぶりですな。」

花柳殿、
雨柳殿…」

騎冥と呼ばれる男は
二人に優しく微笑む。

花柳は、桃色の髪をツインテールにしてい
ぱっちりとした目に薄紫の瞳が
よく似合っている女の子。

雨柳は、空色のショートヘアーで
女の子のような顔立ちが
特徴的な男の子である。

「あつ！ねえねえ…
さっきの任務は僕らに任せてよ」

「私たちなら上手くやれるよあ」

「だって、僕（私）たち…
花雨妖魔族の中で
最も、強いんだもんっ」

そう言ってニコツと微笑む
花柳と雨柳の二人。

騎冥たちも二人の強さを知っていたため、
ここで暴れられては困ると思え…
しぶしぶ、うなずくしかなかった。

花柳と雨柳は子供のようにはしゃいで喜んでいた。

「くれぐれも内密に
お願いしますぞ？」

そんな二人に
一人の男がそう言った。

二人は、その男のほうを向き
「「わかってるもん」」と言った。

そんな様子を
一人の男が静かに
見聞きしていたなど

五人は知るはずもなく…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0545i/>

天舞璃詠—テマリウター—

2010年10月14日11時53分発行